

# interview インタビュー

女性スポーツキャスターの草分け的存在として活躍し、現在はスポーツノンフィクション作家等多彩な顔を持っている。もともとは演劇専攻であった長田さんが、いかにしてスポーツライター・ノンフィクション作家となったのか、インタビューした。

(聞き手：秋田 徹)

プロフィール おさだ・なぎさ

東京都生まれ。桐朋学園大学演劇専攻科卒業。ノンフィクション作家。海外リポーターを経てスポーツライター、キャスターとして活躍。著書に『こんな凄い奴がいた』（ベースボール・マガジン社、文春文庫）のほか、『北島康介』プロジェクト（文藝春秋）、『いつ産むか』などがある。日本スポーツ学会代表理事。

ノンフィクション作家

# 長田 渚左 さん

——演劇専攻でいらしたのに、現在はスポーツライター、ノンフィクション作家ということですが、どういうことでそうなられたのですか。

17歳のときに水上勉原作の「飢餓海峡」というお芝居を観て、これはとてつもない芝居だと…。初めて自分でお金を払って買ったキップで観たお芝居で射ぬかれました。その主役だった女優の太地喜和子さんをその時点で抜こうと思ってしまったんですよ！（笑）

大学で役者になろうと思っていた時期、とことん4年間やりまして、4年生のときに、年間13本芝居をやって、全部主役でした。ですが、私ひとりが役者に向かない！ということを手確信しまして、女優をあきらめました。

ただし、演劇科にいたことで、私は人がすごく好きだなと、人間にまつわる仕事がしたいなあ。4年間でこの2つだけは分かったんですね。

——スポーツライターになられたキッカケは何ですか。

最初はレポーターの仕事をしていたんですよ。だから、へき地にも行きましたし、競馬の仕事もさんざんしました。それで段々淘汰されていって、スポーツの中の人間を伝えたいなあと思うようになっていったのだと思います。

——スポーツあるいはスポーツをしている方と接触してきて、どういうものが得られますか。

スポーツの中で自己表現をしている人なんですよ。人生が凝縮されている、燃焼度が普通の人の4倍…。そこにはもちろん勝利して、成功ということがあるんですが、常に失敗があからさまになりますから、人間がおのずと滲み出る世界ですね！

——去年『北島康介』プロジェクト』『スポーツで育てる』『こんな凄い奴がいた』を出版されていますよね。『北島康介』プロジェクト』を書かれるキッカケは何だったのですか。

